

どうしょう おかざき 道正・岡崎遺跡からみた 越後・佐渡・能登の交流

会期：令和8年 4月25日～9月6日

第1会場：新潟市文化財センター 第2会場：史跡古津八幡山 弥生の丘展示館

1) 沈んだ砂丘の発見から8年

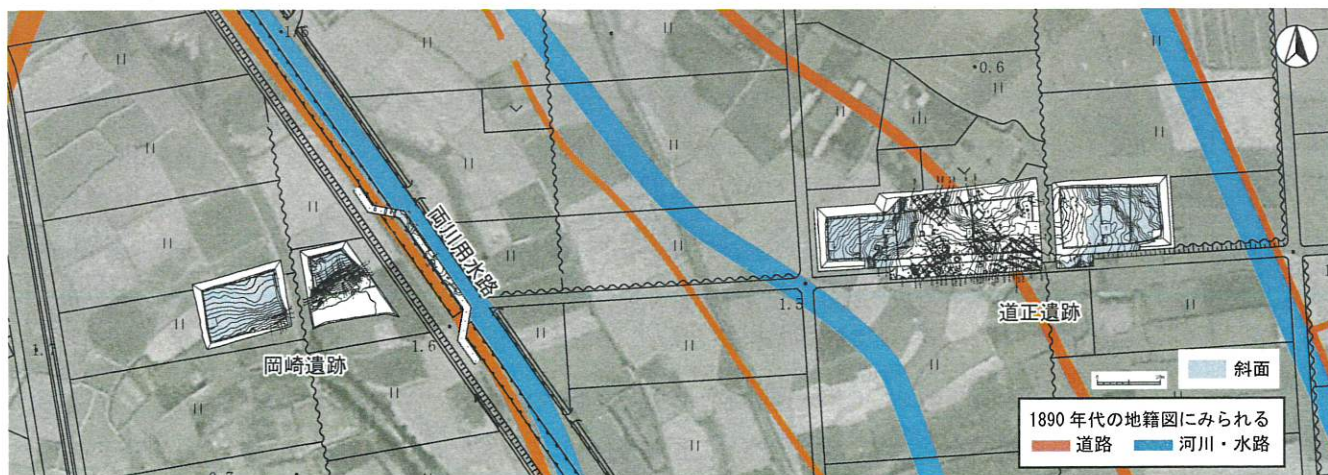
道正遺跡と岡崎遺跡は主要地方道新潟中央環状線建設に先立つ試掘調査で平成30年に発見されました。現在は水田が広がる江南区^{わりの}割野地区の地下に亀田砂丘の続きが沈んでいて、縄文時代から人々が生活していた痕跡が現れたのです。令和元～3年度に本発掘調査を行った道正遺跡では、縄文時代晩期、古墳時代前期、平安時代の生活面が残り、多数の縄文土器や船を線刻した古墳時代前期の土器などが出土しています。令和2・3年度に調査した岡崎遺跡は道路を挟んで道正遺跡の150mほど西に位置します。砂丘の頂部は削られていて建物跡は見つかりませんでしたが、縄文時代から平安時代に至る遺物が出土しました。両遺跡の間にはかつて川が存在していたことから、それぞれ別の遺跡として登録していますが、古代の遺物とともに9世紀後半を主体としており、強い関連をもって営まれていた遺跡と考えられます。令和5年度に報告書を刊行したのを受け、令和6年度は縄文時代、7年度は古墳時代の企画展を開催してきました。令和8年度は最後の第3弾として平安時代の様相を探ります。



岡崎遺跡と道正遺跡（1988年撮影航空写真に加筆）



遺跡遠景（西から亀田砂丘を望む）



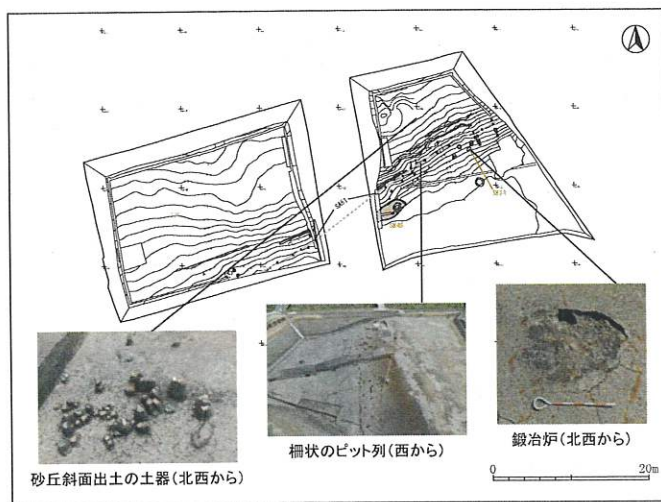
岡崎・道正遺跡全体図

測地系：世界測地系(2011) 座標系：V系
2005年発行「新潟市地形図1:2,500」を加筆修正 背景：1948年米軍撮影写真

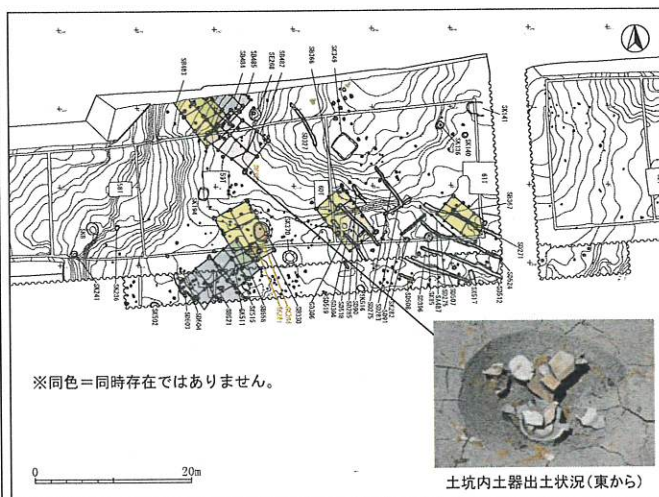
2) 古代の道正遺跡・岡崎遺跡

砂丘頂部が比較的広く残っていた道正遺跡では西側でほぼ同じ向きの掘立柱建物が9棟みつかりました。^{ほったてばしらたてもの} 6棟が総柱（倉庫）でそのうち3棟には床束柱が確認できました。岡崎遺跡では建物の存在は不明ですが、鍛冶炉の可能性がある遺構や砂丘上の平坦地と北側の斜面との境を仕切る柵がみつかりました。

両遺跡とも出土遺物の大半は焼き物の器で、漆が付着したものや墨で文字が書かれたもの、硯に転用されたものもみられます。主に小型の漁網錘も両遺跡に認められます。石製品では棹杵の錘と役人が使う腰帯の飾りが岡崎遺跡で出土しています。これらからは、役所に関する人物がいて文字を書いたり、何かを計量して倉庫に収める・出すといった物資の管理、鍛冶、川や湖沼での漁労、漆を使った作業などが行われていたことが想定されます。



岡崎遺跡令和2年度調査区遺構配置図



道正遺跡令和元～3年度調査区遺構配置図

3) 焼き物の出土状況

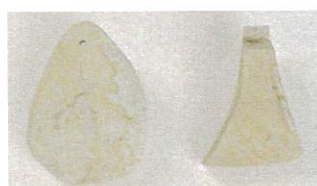
遺物の主体を占める焼き物は、道正遺跡では建物周辺の土坑や包含層から、岡崎遺跡では多くが柵の北側の斜面に捨てられたような状況で出土しました。

現在の新潟県域で作られた土師器・黒色土器・須恵器が主体で、他には東海地方産の灰釉陶器、産地不明（畿内か）の暗文土師器が各1点あるのみです。須恵器の産地はほとんどが佐渡小泊窯跡群とみられます。

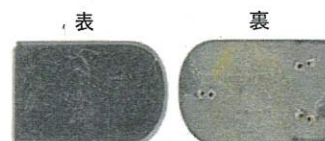
食膳具には硯に転用されたものとともに、墨書も多くみられます。岡崎遺跡では今も能登に地名として残る「羽咋」が5点もあることが注目されます。

食膳具以外では、液体を入れる貯蔵具には須恵器、火にかける煮炊具には土師器という材質に応じた使い分けが明確です。そして煮炊具には作り方の流儀が異なる二種類があります。

土師器・須恵器に比べれば高価な灰釉陶器のほか、突帯付鉢や三耳瓶のようなやや特殊なものは道正遺跡で出土しており、岡崎遺跡とは場の性格に違いがあるようです。



棹杵の錘（槌状錘）



石製腰帯具の鉤尾



道正遺跡出土の古代土器



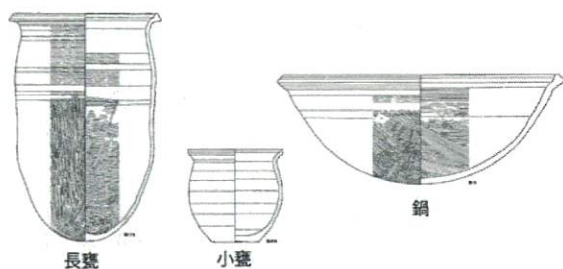
岡崎遺跡出土の食膳具

4) 土師器作りの二つの流れ

道正遺跡・岡崎遺跡で出土した現在の新潟県産の9世紀の土師器には、須恵器の製作技法（ロクロの使用や叩き技法）を取り入れたものといえないものの2種類が存在します。

新潟県域は当時佐渡国と越後国に分かれており、須恵器技法のものは越後の土師器で食膳具と煮炊具があります。煮炊具のスタイルは加賀（石川県）で成立したもので、「北陸型」と呼ばれています。北は秋田県まで日本海側に広く分布します。

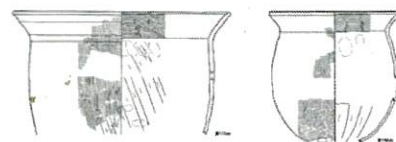
須恵器技法を用いないものは佐渡の土師器と考えられます。佐渡では9世紀後半になると越後の須恵器のシェアを独占するほど須恵器を作っているにも関わらず、土師器では須恵器技法を用いない煮炊具が作られ続けていました。この煮炊具が越後の9世紀の遺跡の多くで北陸型とともに出土することがわかってきており、越後で出土したものを「佐渡型甕」と呼んでいます。



北陸型煮炊具



北陸型の鍋の底



佐渡型煮炊具

5) 二種類の煮炊具

道正遺跡・岡崎遺跡で主体を占める北陸型煮炊具には長胴丸底の長甕、半球形の鍋と、より小型で平底の小甕があり、直接火にかけたのはこの3種と考えられます。煤け方や焦げ付き具合から、長甕はカマドにはめ込む湯わかし釜で、その上に甕（おそらく木製）を置いて米を蒸し、小甕は直接火床に置いて汁物を調理したとみられます。鍋は径が大きく、火にかけていることは確かですが、長甕と同じカマドにかけたかどうかは定かではありません。内容物の焦げ付き跡がほとんどなくその用途も判然としません。

北陸型は本来焼き物の長甕・小甕・鍋・甕の4点セットでしたが、直接火に当たらない甕は木製が主流になって、火に当たるものだけが焼き物として残っていると考えられます。

佐渡型甕は長胴でない丸底で、口が大きく開き身が薄手なのが特徴です。サイズには大小があり、道正遺跡・岡崎遺跡合わせて29個体が確認できました。

6) 道正遺跡・岡崎遺跡の火処を考える

これらの煮炊具を火にかけるための設備はどのようなものだったのでしょうか。

岡崎遺跡では佐渡型甕と共通する質感をもつカマドが出土しました。佐渡で主体的に出土する前後に焚口がある独特な形の持ち運び可能なカマド（可搬式カマド）とみられ、径の大きい佐渡型甕とセットで使われたと考えられます。径の小さい甕は火床に支脚を置いて載せたか、直接置いたと考えることになりますが、佐渡の遺跡では側面に孔のある円筒形支脚が出土する例も多いことから、道正遺跡の短い円筒形支脚が丸底の土器を支えていたのかもしれません。

越後での佐渡型甕と可搬式カマドの出土例をみると、甕だけの例が多いですが、両方出土しているのは西区的場遺跡・緒立C遺跡、東区山木戸遺跡に岡崎遺跡を加えて4例となりました。

さて、この可搬式カマドにはサイズの的に北陸型の長甕を掛けることはできないので、ほかに北陸型用のカマド（おそらく作り付け）があったはずですが、それらしいものは発見されませんでした。



佐渡の可搬式カマド模式図



岡崎遺跡の可搬式カマド

作り付けカマドといえは一般的に竪穴建物に付属するもので、掘立柱建物主体になる9世紀でもカマドをもつ竪穴建物の例はありますので、それをたまたま発見できていない、あるいは掘立柱建物の床の上にしつらえたカマドだった可能性が考えられます。

周辺遺跡でみつまっている北陸型用の火処の可能性のあるものとして、秋葉区細池寺道上遺跡や阿賀野市山口遺跡の「カマド状遺構」があります。掘立柱建物の床上でなく土間に作られた例になるかもしれませんが、類例が少なく、これが北陸型のカマドとして一般的であったかは不明と言わざるを得ません。

また、他遺跡の例からはカマド構築の芯材や煙出し用の部材として円筒形土製品が用いられていた可能性があります。円筒形の支脚も使われたかもしれません。

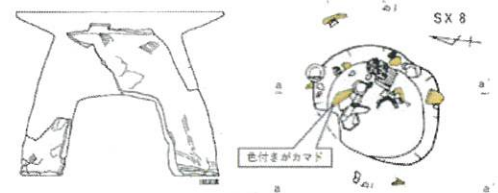
鍋については支脚を用いて囲炉裏に据えることも可能なのでカマドがなくても米を蒸すことができる(裾が「ハ」の字形に広がるタイプの甑を置く)、長甕+甑で蒸す前に米をゆでるために使われた可能性なども提示されており、注意深く観察していく必要があります。

仮に囲炉裏もあったとすると、道正遺跡・岡崎遺跡では三種類の火処が想定されることになります。

7) 佐渡型甕と可搬式カマドはどのように使われたか

西区的場遺跡では可搬式カマドが複数個体あり、関連の深い近接する緒立C遺跡からも出土しています。破片資料のうちには突帯をもつものもあり、異なるタイプのカマドが存在していた可能性もありそうです。

的場遺跡 SX8 では焼土面に伴って可搬式カマドが出土しており、ここに据えて使っていた可能性があります。共伴した煮炊具は北陸型が多いですが、このカマドにかけたとは考えられないので、遠くない場所に北陸型用の火処もあって、そこでの廃棄品も一緒に捨てられていることになるのでしょうか。



的場遺跡SX8遺物出土状況と出土カマド

8) 佐渡型甕と可搬式カマドの存在が示すもの

越後での佐渡型甕出土遺跡は20を超えます。江南区駒首渦遺跡では佐渡型甕の出土遺構が87/476か所に及ぶと報告され、個体数は算定できませんが少なくない数が存在していたとみられます。

佐渡型の甕とカマドがすべて佐渡産であるとすれば、佐渡の人が持ってきたか、佐渡に行った人が持ち帰ったかどちらかです。甕は容器であって中身に意味があった可能性もなくはないですが、カマドもあり基本的にセットであったとするならば、火にかけて使うためのもので、佐渡の人が使ったのなら越後の集落の一部を使って煮炊きしながら滞在していたことを示し、佐渡型甕やカマドは佐渡の人々の活動の痕跡ということになります。使ったのが越後の人なら北陸型用の火処ではできない、あるいはそれを補う何らかの用途のために入手して使ったということで、祭祀などが想定されます。

小泊窯産須恵器の分布からは信濃川の河口付近にあったとみられる蒲原津を經由して越後平野に運ばれていることが想定され、その運搬に関わる人々が来ていることは確かです。カマドを携え煮炊きしながら越後平野を売り歩いていたということなののでしょうか。カマドも甕も壊れたから捨てられたのだと思いますが、そんなにあちこちで壊れたのでしょうか。

佐渡国の出先機関のようなものがあって、商品がストックされ、働く人々のための備えもあったとすれば、壊れても越後国内の拠点に戻ればよいことになります。

あるいは航海術に長けた佐渡の人々は越後国にとってもなくてはならない存在で、越後国に長期滞在して越後国のために働いていたということもあるかもしれません。

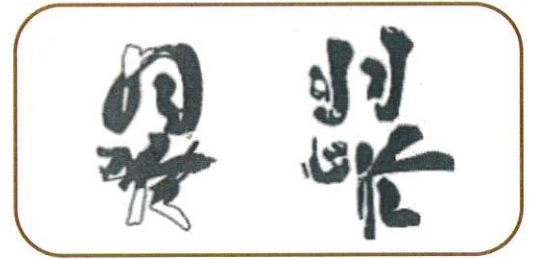
9) 岡崎遺跡の土器に「羽咋」の文字が！

須恵器・土師器の食器に墨で書かれた文字のなかに、一見するとアルファベットの組み合わせにしか見えない変な文字が。いくつか見ていると、どうやら上に「羽」がつくらしい。「羽」といえば担当者(東北出身)の頭に浮かぶのは「出羽」とか「羽前」「羽後」といった地名ですが、どうも違うようです。そこで新潟の墨書文字を研究されている先生に読んでいただくと、「羽咋」ですねとの答え！推定も含めて5点あり、他の文字が1点か2点である中、最も多い例となりました。須恵器に書かれたものと土師器に書かれたものとは、字体に違いがあり、書いた人物が違う、書いた時期が違うなどのことが想定されます。

「羽咋」。能登半島にそんな地名が今もあります。そんな文字がどうして新潟の9世紀の土器に書かれているのでしょうか。



須恵器に書かれたもの
細線でスリム



土師器に書かれたもの
太線で幅広



羽咋郡の所属の変遷
養老2年(718)まで「越前国」
天平13年(741)～天平勝宝9年(757)まで「越中国」
養老2(718)～天平13年(741)と天平勝宝9年(757)以降「能登国」

10) 「羽咋」は地名？人名？

律令制下では能登半島の「羽咋郡」の中に「羽咋郷」がありました。奈良時代までの「羽咋郡」は制度の変更により3度所管する国が変わっています。

人名としては、律令制以前には豪族「^{はくいのくにのみやつこ}羽咋国造」がおり、その子孫として「^{はくいのきみ}羽咋君」氏がいます。平城京出土の木簡から「^{あた}羽咋直」氏がいたこともわかります。

「郡」「郷」「君」「直」や人名と推定できる文字が続いていない「羽咋」は、地名なのか人名なのかそれだけでは判断できないと言えます。

墨書土器の例 「羽咋郡」と土器に墨で書かれた例が石川県かほく市(旧宇ノ気町) ^{うのけ}指江 B 遺跡で1点出土しています。ちなみに明治大学の墨書・刻書データベースで「羽咋」を検索してみると、この1点しか出てきません。したがって、墨書土器に限れば岡崎遺跡出土例により今現在「羽咋」の出土例が最も多いのは新潟県ということが判明しました。

その他の出土文字資料にみる「羽咋」 遺跡から出土する文字資料としては木簡や漆紙文書などもあり、奈良文化財研究所の木簡データベース「木簡庫」で「羽咋」を検索してみると、13例みられます。出土地は藤原京、平城京、平城宮という宮都が12例、石川県が1例です。これらから以下のことがわかります。

(反対面) 長口(屋カ) 皇宮一石◇
羽咋直嶋◇
一従一八位下額田嶋守
一少一初位上羽咋佐祢比等

(平城京左京三条二坊八坪長屋王邸出土)

(平城宮第一次大極殿院地区西樓出土)

細尺不周 出典：木簡庫
(<https://mokkan.ko.nabunken.go.jp>)

- A 「羽咋直」氏が存在すること
B 「羽咋直嶋」「羽咋直羊」がついた米を平城京の長屋王邸に送っていたこと
C 「羽咋佐祢比等」は少初位上の官位をもち、下の名前不明ながら正八位上の官位をもつ者がいたこと
D 「保長」を務める者がいたこと
E 「白丁羽咋」が丹波国に移送されていること
F 天平18年(746)に越中国羽咋郡から中男作物の鯖が都に送られていること
G 越中国羽咋郡邑知郷出身の衛士に「乃止臣吉麻呂」がいて銭600文が家族から届けられていたこと

A～Eは羽咋を名にもつ人々の動向を示すもので、奈良時代には、一族のうちには官位をもつものも輩出する、在地では有力者の部類に入る氏族であったと思われる。

*「直」は地方豪族(国造)に与えられた称号、米が送られたのは長屋王の変が起きた天平元年(729)までに限定できます。

*官位の正八位上は大上中下とランク付けされたうちの中国の国司三等官、少初位上は下国の国司四等官につける位。

*「保長」は近隣5戸で構成した末端行政組織の長のことで、相互検察などを行ったとされています。

*「白丁」は律令制の諸官司・神社・駅・国衙などに配されて雑務に従った無位無官の良民。

Gからは、羽咋郡に乃止臣氏も住んでいたことがわかります。乃止(能登)臣氏は隣の能登郡が本拠地とみられる氏族ですが、羽咋郡の郡司として文献史料に名前が出てくるのはこの能登臣氏であることから、奈良時代には能登臣氏が勢力をのびし、羽咋氏は郡司としては活躍していないのではないかと指摘もあります。

11) ほかにある北陸西部ルーツの地名・人名

『日本書紀』には7世紀半ば、磐舟柵の設置に伴い越・信濃両国から柵戸を入れた記事があり、磐舟郡や淳足柵が置かれた沼垂郡にみられる越前・越中・信濃の郡名と同じ郷名(山家・利波・坂井・足羽・賀地)は、城柵の設置に伴って移住してきた柵戸にちなむものとの指摘があります。このことから、出身地ごとにある程度まとまって住み、開拓にあたっていたことが想定できるのではないのでしょうか。

蒲原郡以南には移民の記録はありませんが、岡崎遺跡の3kmほど北に位置する江南区駒首潟遺跡出土の第1号木簡に「足羽臣」と書かれていました。字の練習ですから、この遺跡にいた人物が書いて捨てたものです。越前国足羽郡を本拠としていた氏族が9世紀ころ駒首潟遺跡か近辺にいたことを示す有力な証拠です。

長岡市八幡林遺跡の第23号木簡には「能登豊万呂」、第4号木簡には「射水臣」がみられます。これらからも越中以西にルーツのある人々が蒲原郡以南の越後各地でも活躍していたことがうかがえます。

大宝2年(702)に越後国に移管されるまで、蒲原郡・古志郡・頸城郡・魚沼郡は越中国に属していました。当然越中国の中枢から様々な差配がなされていたはずで、越中ルーツの人々の存在も納得できるというものです。

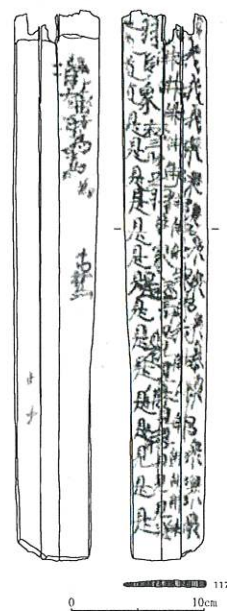
八幡林遺跡の木簡から、羽咋郡の隣の能登郡にルーツのある「能登臣」氏が古志郡あたりにいたことが想定できるとすると、「羽咋氏」も越後にいた確率が高いと思われます。ただその勢力は「能登臣」氏ほどではなかったのかもしれませんが。

各遺跡の墨書土器において特定の文字が多数を占める例が多くみられ、それが氏族の標識や有力者の存在を示すと考えるならば、9世紀に墨書された「羽咋」もそのようなものであり、「羽咋」の地にルーツをもつ人々の存在があつてこそではないのでしょうか。

それでは、能登から人が移り住んだとすればいつごろのことでしょうか。能登と蒲原郡・古志郡・頸城郡・魚沼郡はいずれも一時期越中国でしたが同時ではなく、越が三分されて以降は常に違う国です。ある程度まとまって国を越えて人が動くには中央の政策がなければ考えにくいとすれば、越が三分される以前か三分されてまもないころまでだったのではないのでしょうか。

7世紀末～8世紀初頭ころには柏崎市刈羽大平遺跡で能登の技術が移入されて製塩が始まっていると考えられることや東区山木戸遺跡の能登に類例のある糸巻形のカマド支脚をもつ竪穴建物の存在がその動きを示しているかもしれません。

年	出来事
天智6年(668)～持統6年(692)	このころ高志(越)の国が前中後に分割される
大宝2年(702)	3月越中国から4郡(頸城・古志・魚沼・蒲原)を割いて越後国につける
和銅元年(708)	9月出羽郡の立郡
和銅5年(712)	9月出羽国の建置
養老2年(718)	5月越前国から4郡(羽咋・能登・鳳至・珠洲)を割いて能登国立国
天平13年(741)	能登国が越中国に併合される
天平20年(748)	越中守大伴家持が能登半島各地を巡行
天平勝宝9年(757)	5月4郡を能登国に復す * 改元は8月



駒首潟遺跡第1号木簡

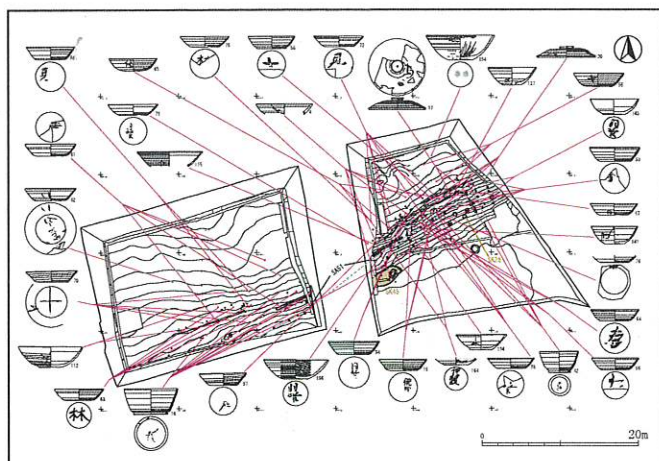
12) 道正遺跡・岡崎遺跡のその他の墨書土器

道正遺跡では合計 12 点、岡崎遺跡では「羽咋」とみられる 5 点を含め合計 34 点の墨書土器が出土しています。須恵器の無台杯、土師器の無台碗に書かれる例が多く、須恵器有台杯とその蓋に書かれる例が少数みられます。書かれる部位としては外面の底が多く、土師器では側面に書かれるものも多い傾向がみられます。

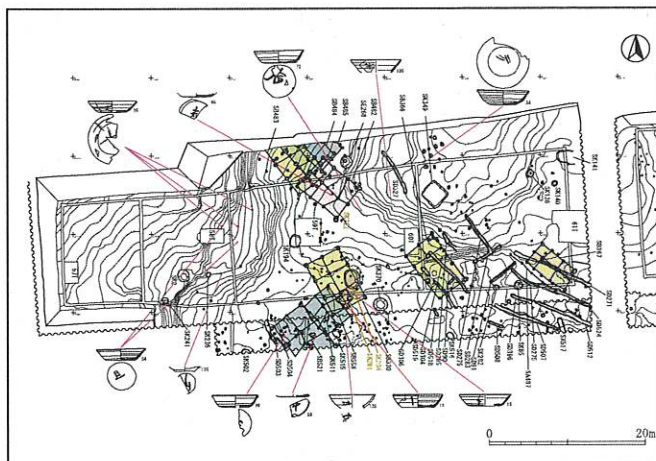
複数認められる文字としては「木」が道正遺跡で 2 点、「林」が岡崎遺跡で推定も含め 2 点あります。そのほかは 1 点ずつで、「佛」「中」「真」「与」「上」「見」など一文字のものが多くを占めます。達筆な二文字の「伊口〔継力〕」は人名でしょうか。

「十」のように見えるものは文字というより記号と考えたほうがよいかもしれません。1～2 か所に大きく書かれたものが両遺跡で出土しています。

食器になぜ文字が書かれたのかについては、所有者や管理場所を示すためとみられる例ももちろんありますが、自らの名前を書いた器に神仏への捧げものを入れたり、それ自体に縁起のよい言葉や願いを書いたりといった場合が多かったのではないかと思います。



岡崎遺跡墨書土器出土状況



道正遺跡墨書土器出土状況 ※同色＝同時存在ではありません

13) 市内主要遺跡の墨書土器

的場遺跡 ^{すぎひとのさけ}「杵人鮭」木簡と大量の漁労用具（管状土錘 8600 点、木製浮子 ^{うき} 100 点程）が出土し、鮭・鮭の加工を行った場所と考えられています。祭祀具と帯金具など官人の存在を示す遺物、人名や符号とみられる墨書のある土器が多数出土しています。

人名とみられるものでは、女性名（〇〇女）は北斜面に出土が限られ、梳櫛の出土も北斜面域だけであることと符合します。^{ひろなり}「廣成」は 2 か所に分散します。^{おとなが？}「乙長」は一番多く出土した名前です（乙長 15 点、長 8 点、乙 5 点で計 28 点）、「乙長」は北斜面にもありますが南斜面域東側に明らかに多い傾向があります。

駒首潟遺跡 ^{しめんひざし}居住用と倉庫とみられる掘立柱建物と四面廂付の仏堂、船着き場などがある大規模な集落跡です。109 点の墨書土器が主に旧河川とその西側の遺構から出土しました。「大」「十」は道正遺跡・岡崎遺跡にもみられますが、ほとんどは全く異なる文字種からなっています。複数出土するものには「大」17 点、「十」12 点、「久」10 点、「善」7 点、「足」「卅」各 5 点、「山」4 点、「三」「柱六十」各 3 点。文字種ごとに出土地点のまとまりがみられるものがあります。

14) まとめにかえて

第 1 会場では、道正遺跡・岡崎遺跡の出土遺物に思いのほか佐渡型の煮炊具がたくさんあり、カマドも出土していることに注目して佐渡との関わりを考えました。佐渡型甕の成立過程や須恵器技法が採用されないことの背景、越後で出土する佐渡型甕やカマドがすべて佐渡のものなのか、などこれから明らかにしていかなければならない課題はたくさんあります。

第 2 会場では「羽咋」の墨書文字から能登との関わりを考えてみました。墨書された土器が示す 9 世紀後半ではなく、その 100 年以上前に能登から人々が来ていると考えるわけですが、最初アルファベットにしか見えなかった「咋」の独特な字体は、本拠地を離れて年月がたつうちに、本来の字形が意識されなくなり記号に近くなっていることを示しているのではないのでしょうか。

能登にルーツをもつ人々がおり、佐渡の人々も一時滞在したかもしれない平安時代の道正遺跡・岡崎遺跡は、ある程度の官位をもつ人物の関与は想定されとしても、約 6 km 東の亀田砂丘上に位置し、規模の大きい建物やより高級な緑釉陶器をもつ江南区小丸山遺跡に比べれば実務的な様相が強く、土器の内容的には駒首潟遺跡の方に近い様相をもつと思われます。どんな品物を棹秤で量り倉庫に収めていたのか、農耕はしていないのか、そしていまだ明らかなでない蒲原郡衛との関係など今後の検討課題です。

主催・お問い合わせ先

新潟市文化財センター TEL 025-378-0480

〒950-1122 新潟市西区木場 2748-1 FAX 025-378-0484

<https://www.city.niigata.lg.jp/kanko/bunka/rekishi/maibun/index.html>

開館時間／平日 午前 9 時～午後 5 時

土・日・祝日 午前 10 時～午後 4 時

休館日／月曜日（祝日の場合は翌日）、祝日の翌日



企画展関連講演会・展示解説 ※申し込み不要

会場：新潟市文化財センター 1 階 研修室（第 2 展示会場とは異なります）

7/18 土

「出土資料から考える越後の古代世界」

午後 1 時半～午後 3 時

講師/奈良佳子（文化財センター文化財専門員）

講演会終了後、
展示解説を
30 分程度行います